

及川先生の背中

平治は冷たくなった父の傍らで、一人じつと座っていました。長く病にふしていた父が息を引き取ったのです。楽ではない暮らし向きでしたが、「学校へ行ってしつかり学べ。そして人の役に立つ人間になれ。」と、平治を学校に通わせてくれた父が、いましがた息を引き取ったのでした。

葬儀の片付けが終わった夜、平治は父の死から思案し続けた結論を母に告げました。

「母さん、ぼく明日から働くよ。」

母は瞳を潤ませしばらく平治を見つめていましたが、小さくうなずきました。

その当時の教育は森有礼によって一八八六（明治一九）年に公布された「小学校令」に基づいて行われていました。

「児童六年ヨリ十四年ニ至ル八箇年」の間、教育を受けることとされてきました。今の義務教育に当たりませんが、実態は名ばかりで、無償ではなく、貧しい家庭では子供を学校に通わせるのは大きな負担でした。

向上心の強かった平治も、父の死によってやむを得ず学校をやめ、働くことになったのです。しかし、平治は学ぶことをやめませんでした。独学して高等小学校卒業程度の学力をつけ、授業雇いという代用教員として、母校の教壇に立ちました。

及川平治。

彼は一八七五（明治八）年に宮城県で生まれました。いま述べたように苦学して代用教員になり、十八歳で師範学校に入学します。宮城、東京で小学

校の教員を務め、一九〇七（明治四十）年に兵庫県明石女子師範学校付属小学校に赴任しました。それから三十年間、一九三六（昭和十一）年に退職するまで、付属小学校で教師として働き続けました。

及川さんは苦学して教員になった自分の経験から、教師となつてからも、子供たちがわかる授業をするために、教育の方法について様々に試行錯誤を繰り返しました。

またその生い立ちも彼の教育に影響を与えています。こんなことがありました。教え子の中に、体が大きくなつても制服を新調できない子がいました、ある日、及川さんはその生徒の家へ行き、

「お母さん、これはあまりそでを通さずに転校して行った子から譲り受けた

制服です。お子さんにどうぞ。」と言
って包みを置いていきました。母親が
開けてみると、それは明らかに新品で
した。慌てて返そうと外へ出ると、先
生はもう遠くの角を曲がるところでし
た。母親は、まっすぐにピンと伸びた
及川先生の背中に深々と頭を下げまし
た。

及川さんが教師として活躍した大正
時代の教育は明治時代のものでした。
及川さんには、教育の方法がどうして
も形式的に感じられて仕方ありません。
当時、教育界では及川さんと同じよ
うな考えをもつ人々が多くいました。
画一的で型にはまった教育スタイルを
なんとかしようという運動が、折から
の大正デモクラシーの風につて全国
に広がっていました。

兵庫県で教師をしていた及川さんは
「分団式動的教育法」を提起し、全国
の教育に新風を吹き入れたのでした。
この教育方法は、子供の個性を大切に
し、子供の活動を重視した授業を実践

するといふもので、全国から多くの教
師が参観に訪れました。

一人一人の子供にあたたかく接する
及川さんの広い背中が、個性を生かす
教育の大切さを無言で伝えていたよう
でした。

現在の神戸大学付属明石小学校・付
属小学校の校長室に、

「新教育の幕を開かん 凡ての人のた
めに 凡ての子供等のために 私の凡
てを捨てて 及川平治」と
墨書された文字が額に入れられ、掲
げられています。

そこにはペスタロッチと共通する教
育者としての熱い思いが込められてい
ます。及川さんは、子供たちを教えな
がら、子供の視点で教育を組み立てよ
うとしました。

まだ中学生のあなたたちは、学ぶ側
の立場ですから、及川さんの話はいさ
さか退屈だったかもしれませぬね。

しかし、教育はあなた自身の宝にな
るものであり、社会の発展のためにも
欠かせないものなのです。

今日学ぶこと、知ること、身につけ
ること、それはあなた自身の未来の糧
になるでしょう。そしてそれは、いず
れ必ず世の中の役にも立つのです。

及川さんは、その教育の要である
「日々の授業」の改善に、自分のすべ

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止
します。

てをかけた人でした。